



第68回 明治大学中央図書館ギャラリー展示

明治大学中央図書館の 日本中世文学関係典籍 —毛利家旧蔵の歌書・連歌書を中心に—

会期 2017年5月18日(木)～5月28日(日)

会場 明治大学中央図書館1F ギャラリー(入場無料)
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL 03-3296-4250

時間 図書館の開館中は観覧いただけます。
開館情報はホームページでご確認ください。
<http://www.lib.meiji.ac.jp/>

共催 明治大学古代学研究所



明治大学中央図書館の日本中世文学関係典籍 —毛利家旧蔵の歌書・連歌書を中心に—

2017年5月27日(土)・28日(日)に本大学で開催される中世文学会春季大会に合わせて、明治大学中央図書館が所蔵している中世文学関係典籍を紹介します。

今回は、毛利家旧蔵本¹のうち、歌書・連歌書のいくつかを中心に展示いたします。

1『拾遺愚草』には、下冊末尾に毛利弘元(元就の父)の署名があります。2『御詠草』は毛利元就の和歌と連歌を集めたもので、歌集末尾部分に三条西実澄の跋文、連歌末尾部分に里村紹巴の跋文があります。3～7は元康(元就の子)が関係したもので、識語から、紹巴・玄仍親子との交流を窺うことができます。そのほか9から19まで、室町時代の歌書・連歌書で、いずれも美しいものです。また歌書・連歌書が納められた箱も貴重です。20から25までは、時代は下りますが、丁寧に写された立派な本です。

毛利家旧蔵本には、歌書・連歌書以外の典籍も数多く含まれます。それらのうち、若干のものも展示しました。26『平家物語』は赤間神宮に伝わった本と同系統で、長門本と言われる20冊本です。27『東鑑』は文禄から慶長の頃の書写で、島津本系統の中でも重要な写本です。そのほか、豊臣秀吉や楠正成、源義経、織田信長らの名前の見える典籍(28～31)もあります。

以上の毛利家旧蔵本の他、特別に『除秘抄』『除秘抄附』を展示しました。『除秘抄』は三条西公條筆で、後三条天皇撰『院御書』の除目儀の部分に当たります。他に存在の知られていない貴重な本です。これらについては、明治大学古代学研究所でも研究を進めていますが、今回の展示ではその協力を得て、同研究所所蔵典籍の一部も展示しました。

なお、明治大学博物館には毛利家文書が所蔵されていますが、現在、そのうちの文学関係典籍を同博物館で展示²していますので、ぜひ合わせて御覧ください。

終わりに、今回の展示にご協力いただいた、明治大学中央図書館に謝意を表します。

明治大学文学部教授
牧野 淳司

* * * * *

1. 毛利家旧蔵書 (中央図書館蔵、約6900 冊)

長州藩毛利家伝来の蔵書で、歌書、歴史書などからなる。天下の稀本といわれる『源氏ものあらしひ』や里村紹巴系統の連歌書など、各家の自筆や書入れ本、写本など貴重な資料を含む。藩政文書も多数あり、文書類は博物館に収蔵されている。

2. 明治大学博物館「新収蔵・収蔵資料展2017」

会期:4月15日(土)～5月28日(日)

会場: 明治大学博物館 特別展示室

開館時間:10:00～17:00(入館は16:30まで)

「明治大学中央図書館の日本中世文学関係典籍 ―毛利家旧蔵の歌書・連歌書を中心に―」 展示書目リスト

1 『拾遺愚草』上・中・下・員外雜歌 四冊

下冊末尾「治部少輔／弘元（花押）」

2 『御詠草』一冊

歌集末尾「于時元龜第三曆仲呂吉辰／懸車老翁特進実澄」

連歌末尾「元龜三年二月はしめ、是をしるし終りぬ／紹巴在判」

3 『三部抄註』一冊

末尾「這三部抄者宗祇作也、朱書者玄仍老大坂下／向之刻 于時慶長四稔十月令聽書訖／元康（墨印）」

4 『勅撰名所拔書』一冊

5 『仮名遣定家卿御作』一帖

末尾「此一冊者、毛利大蔵大輔殿元康／御書写畢、一覽之次／誌之者也／文祿四年五月下旬／紹巴（花押）」

6 『出葉口伝抄』一卷

末尾「此一巻者、毛利元康依御執心／御懇望之間、口伝之已後、玄仍／染筆奉送之者也／慶長四年林鐘上旬／法眼紹巴（花押）」

7 『出葉口伝抄』一卷

末尾「天正十九年秋季下旬／老酔人書之 紹巴在判／慶長七年 書之」

8 歌書・連歌書一箱（歌書・連歌書十八点 *内、四点は別に展示）

9 『三部抄』一帖

10 『飛鳥井雅親卿歌書』一帖

末尾「右一帖者、大樹当家依被仰／出、累祖雅親卿法名榮雅奉注進／抄出也、尤以可為秘說者也、不可／有外見而已」

11 『新式追加』一帖

末尾「應安以來新式之今案、追加條々／并近代用捨篇目等、依多其端、／末学常迷之、商量而今彼是／勒以為一冊、但猶未一決之事、或／暫漏之、或先載之、以待後君子／志同者、從之亦宜乎　／文龜辛酉林鐘上澣　肖柏」

12 『下紐』一帖

13 『連歌新式拔書』一帖

14 『至宝抄』一帖

15 『和歌條々』一卷

末尾「右、和哥之条々、為弘中源治郎興勝／注之訖　／永正六年閏八月日　／權中納言雅俊（花押）」

16 『源氏物あらそひ』一卷

末尾「于時應永廿年七月一日書之　／　龜若丸」

※参考文献…平田さくら「貴重書紹介『源氏物あらそひ』」（『明治大学図書館紀要』三号、一九九九年一月）

17 『連歌新式拔書』一帖

18 『連歌比況集』一帖

- 19 『新哥仙』一帖
- 20 『詞花和歌集』一帖
- 21 『風雅和歌集』上下二帖
- 22 『続千載和歌集』上下二帖
- 23 『新続古今和歌集』上下二帖
- 24 『古今集歌合』上下二冊
- 25 『小夜のね覚』一冊
写本云
 末尾「右一巻、以称名院内大臣
公孫公正筆之本、／一時写之畢、一條禪閣御作、号／小夜寢覚也／于時天正十九年七月八日 称好齋」
- 26 長門本『平家物語』二〇冊
- 27 『東鑑』
- 28 『行幸之次第』一帖
- 29 『高麗物語』上下二冊
- 30 『楠家系図草稿』一冊

特別展示 『除秘抄』称有仁公抄 或称俊明卿抄

奥書 「本云建久三年十二月十二日、於燈下校合了、／有仁公次第云々或云俊明卿次第云々、

正平九年六月廿三日、一見了／左大将判／右以件奥書本卒馳筆了、／天文九年正月廿六日／按察使三条西公卷(花押)」

明治大学中央図書館所蔵三条西家旧蔵本『除秘抄』・『除秘抄附』について(解説)

須藤あゆ美(明治大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC1)

県召除目の儀式次第・作法を書いた儀式書。奥書によれば、天文九年(一五四〇)に三条西実隆(一四五五〜一五三七)の息子公条(一四八七〜一五六三)が書写したという。昭和二十七年(一九五二)の受け入れ印が捺されていることから、戦後大量に流入した三条西家旧蔵本のひとつであると考えられている。以下、東京大学史料編纂所の田島公氏・末柄豊氏の研究成果を踏まえた上で、本書の概要と史料価値について述べる。

本書は『群書類従』等に所収される中原氏による『除目抄』(別名『除秘抄』)とは別物で、すなわち後三条天皇自撰の詳細で長大な儀式書『院御書』のうちの除目部分にあたる。長らく、後三条天皇撰『院御書』の全貌は不明のままであったが、近年の研究によって尊経閣文庫所蔵『無題号記録』こそ『院御書』であるという事実が立証され、逸文でしか知り得なかった後三条天皇撰『院御書』のまとまった本文の検討が可能となった。ただし、尊経閣文庫所蔵『無題号記録』は「京官除目」二日目の途中より欠落しており、その後欠部分の発見が俟たれていた。そのような状況下、幸運にも明治大学中央図書館より三条西家旧蔵本『除秘抄』が再発見されたことで、本書が『無題号記録』「除目事」「京官除目」初日部分と同文であること、さらには『無題号記録』後欠部に続くかなりの分量を有していることが判明した。これにより、後三条天皇撰『院御書』の実態がさらに明確化することは間違いない。

また、本書冒頭割書に「称有仁公抄 或称俊明卿抄」とあるように、源有仁(一一一〇〜一〇三七)編著の可能性が示唆されていることは興味深い。有仁は後三条・白河両天皇と村上源氏系公卿に伝わる叙位・除目の儀式作法を集大成して多くの儀式書を生み出した人物で、その説は鎌倉・室町期以降の非撰関家のなかで「花園説」として継承されてゆく。もし、本書が元々は有仁の編著であるとすれば、後三条天皇から有仁につながる叙位・除目書の系譜やそれら儀式書の製作過程を説明する一助となるはずである。

さらに、もう一つの史的価値は三条西実隆・公条父子に充てた紙背文書の書状にある。その数は全体で五十通弱にも及び、とくに北陸三国（若狭・越前・能登）の武士による書状は十九通を数える。中にはたとえば、能登守護畠山義総が公条に『史記』・「伊勢物語御聞書」などの書籍の貸借や教授を求めたこと、義総の被官温井孝宗が実隆に「源氏之色紙」や「源氏之ちう」といった『源氏物語』関係書物を所望する様子も見え、文芸を希求してやまない北陸武士たちの生々しい肉声を聞くことができる。その他、周防の杉興道や河内の木沢長政、連歌師肖柏・宗牧など全国各地からの来信も見られ、差出人の多様性は三条西実隆・公条父子の声価が地方にまで広く及んでいたことをよくあらわしている。本書の紙背文書を研究することで、十五世紀から十六世紀の京都と地方をつなぐ文化的ネットワークの様相がよりいっそう明らかになるはずである。

なお、『除秘抄附』は『除秘抄』とセットで見出されたため仮に付した名称である。内容は除目の作法を項目ごとに分け、「申云：：」「仰云：：」のように問答形式で先例を交えながら自説を語る構成をとっている。前欠で識語も持たず錯簡も存在するが、その筆跡によると『除秘抄』と同じく三条西公条にかかるといえるかと推測される。今後、本文の積読を含めた精細な検討が求められるが、今現在、明治大学古代学研究所の日本文学・日本史学専門の所員らが協力して研究を進めている。

【参考文献】

- ・田島公「源有仁編の儀式書の伝来とその意義——「花園説」の系譜」（『史林』第七十三卷第三号、一九九〇年五月）
- ・田島公「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』解説」（前田育徳会尊経閣文庫編『無題号記録 春玉秘抄』八木書店、二〇一一年九月）
- ・田島公『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一一―二〇一三』目録学の構築と古典学の再生——天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明——』（東京大学史料編纂所、二〇一二年三月）
- ・田島公「三条西家旧蔵『除秘抄』について（本文篇）」（『東京大学史料編纂所報』四十七号、二〇一二年十月）
- ・末柄豊「畠山義総と三条西実隆・公条父子——紙背文書から探る」（『加能史料研究』二十二号、二〇一〇年三月）
- ・末柄豊「一乗谷に文化を伝えた人びと」（『戦国のまなびや 朝倉文化 文武を極める』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、二〇一三年九月）
- ・末柄豊「三条西家旧蔵『除秘抄』について（紙背文書篇）」（『東京大学史料編纂所報』四十七号、二〇一二年十月）